

能登半島地震の被災地では、薬局の機能を備えた「モバイルファーマシー」（移動薬局車）が全国各地から次々と派遣され、被災者に薬を届けている。

岐阜県薬剤師会のチームは、石川県薬剤師会から要請を受け、7日、珠洲市に入った。車内には、薬を小分けにする機械や冷蔵庫などを備え、風邪薬や塗り薬、湿布など100種類以上の薬が積み込まれている。各避難所を回り、医療支援にあたる医師が出した処方箋に基づき、薬剤師3人が調剤や服薬指導を行っている。

動く薬局 安心お届け

8日以降、1日あたり約40人に薬を提供し、被災者の健康を支える。高血圧や糖尿病などの慢性疾患の薬のほか、解熱剤や便秘薬などの処方も



岐阜県薬剤師会が派遣した「モバイルファーマシー」（11日、石川県珠洲市で）

目立ってきているという。11日は複数の発熱患者が確認された市内の高齢者施設へ出向き、医師が必要と判断した解熱剤やせき止めなどを速やかに調剤し、施設内に運んだ。

チームを率いる薬剤師の林秀樹・岐阜薬科大教授は「必要はさらに増えるだろう。必要な薬を供給し、被災者に安心感をお届けられれば」と話す。

移動薬局車は2011年の東日本大震災を教訓に導入された。厚生労働省によると、石川県内では11日現在、三重県や宮城県、和歌山県の薬剤師会などのチームも活動している。（鈴木恵介）